

10・22 衆院選を終えて 学び、つながり、市民力を高めよう



菱山 南帆子 さん
(許すな! 憲法改悪 市民連絡会)

今回の衆院選は火事場ドロボー的、解散から選挙まで最短の日程でした。日本会議の幹部から「2015年の戦争法成立時のような野党連合をさせてはならない」と指摘された自民党は、民進党の求心力の低下に「今だ」と選挙に踏み切ったのだと思います。希望の党が誕生し、民進党が丸ごと合流することになった時、だれもが「野党共闘は終わった」と感じたと思いません。「小池さんとは一緒にやれない。最悪、社共共闘でやるしかない」と。

そんな土壇場、市民の声に押されて枝野さんたちが立憲民主党を立ち上げた。市民と野党が共闘した2年前、戦争法反対のたたかいがあったからこそだと思えます。今回、市民連合として各地を回りましたが、立憲野党統一候補を擁立することが結果として当選につながると強く感じました。

市民と野党の共闘

福山哲郎さんも演説の中で「雨が降るたびに9・19の国会前のたたかいを思い出す。

波乱の衆院選。結果、自公政権が3分の2議席を獲得したが、比例での得票数を見る限り、「圧勝」とはいえず、短期間での準備を余儀なくされながら立憲野党が存在感を強めた選挙でもあった。

研究者、市民運動家、立候補してたたかった3人の女性たちに、それぞれの立場から衆院選を振り返り、今後について語ってもらった。

ぶれないことの大切さー政策語れる市民に



大澤 眞理 さん
(東京大学教授・社会政策)

市民との共闘を忘れられない」と強調していました。結果的には立憲民主党に現在、日本会議の方はなくなりました。「ぶれないこと」の大切さを知った市民は、雨降って地固まるといわれるように、いつそつ団結と信念が固まったのだと思えます。私たちは自信を持ち、市民運動を前進させることができると確信を得ました。

しかし国会内では改憲勢力が8割を占めることになりました。来年の通常国会で改憲発議をさせないためには、国会外のたたかいを積み上げていくことが、さらに重要となります。

私たち一人ひとりが主体性をもって「なぜ平和憲法が必要なのか」「なぜ9条に自衛隊を書き加える必要がないのか」と、政策が語れる市民になることが求められています。

(聞き手・花澤眞美)

政権のウソを見抜く力をー女性議員たちに期待

衆院選の公示直前に開かれた「安倍9条改悪NO! 大学人と市民の集い」で私は「ウソは泥棒の始まり、いずれは国民主権が盗まれる」という話をしました。国民主権はまさに首の皮一枚でつながっているにすぎません。選挙を経て、それはさらに強まっています。

安倍首相の主張、アベノミクスの成果はほとんどウソ。基準を勝手に動かして、良くなっていると見せかけているにすぎません。例えばGDP統計は2005年基準から2011年基準(低迷期)に切り替えたため、2015年は30兆円以上多くなりました。賃金・俸給に役員賞与を含め、労働力調査も基準の改訂で正社員が12万人以上増えたことにしました。戦艦や戦車の購入は、公的資本形成にしました。アベノミクスのこうした欺瞞を国民に明らかにしていく必要があります。

「増税分を教育無償化に回す」という使途変更もウソでしょう。社会保障の機能強化は、安倍政権になる前から志向されていました。「男性稼ぎ主」を前提とする1970年代モデルから、21世紀日本モデルに全世代対応型への転換です。アベノミクスでは社会保障の機能強化の方向性が希薄。少子化対策も経済成長のため、2015年度「経済財政再生計画」からは公的サービスの産業化を打ち出しています。消費税率引き上げを2度先送り、つまりは社会保障をカットしています。いままら使途変更を言われても、国民を欺くためとは思えません。

厳しい選挙結果でしたが、志を同じくする女性議員が小選挙区で勝ったことは頼もしい。これまで民進党ではあまり質問の機会を配分されませんでした。今後国会で彼女たちは代表選手となるでしょう。

(聞き手・中村ひろ子)